

# 19 極北の町を見捨てない国

幸運なことに、目指すフィンマルク県ヴァドソーには、長年の友人でNRK（ノルウェー放送協会）勤務のベンテ・シェルヴァンが、フィンマルク支局に転勤したばかりでした。

計画を知らせるメールを出したら、「今日は零下28度ですよ」という返事。すぐ私は、新宿の山岳ウェア専門店に行きました。北緯70度4分の北極圏を旅すると言うと、ヒマラヤのトレッキングにも使えるというフード付きダウンコートとダウンパンツを勧められたので、思い切って購入。

2011年2月、旅立ちました。

## 大探検家アムンセンの飛行船基地

2月20日、夜7時、オスロ空港着。ヴァドソーへはオスロに1泊して、翌朝、キルケネス空港に飛び、そこからプロペラ機に乗り換えなければなりません。睡眠不足でショボショボの目をこすり、スーツケースを引きずりながらオスロ空港ビルを出たとたん、顔がビリビリとこわばりました。すぐに引き返して空港のカウンターで聞くと、「今、零下15度ですね」。

翌朝、オスロ空港でヴァドソーまでの航空券を買うと、カウンターの職員はニコニコ顔で、「オーロラ観光ですよね」。

午前8時にオスロを出発して、午後2時過ぎには最終地ヴァドソーに着きました。ロビーに長椅子が1台あるだけの殺風景な空港です。体ごと吹き飛ばされそうになりながら、タクシーに乗り込み、友人宅に向かいました。

午後3時前なのに暗くて、窓の外に見えるのは猛吹雪のみ。かの偉大な探検家ロアル・アムンセンが1929年、北極横断に使った飛行船ノルゲ号の繫留塔も、吹雪に消されて見えません。

その夜は早々に就寝。除雪車のうなり声が近づいたり遠のいたりします。夜のうちに除雪しておかないと、翌日、町が機能しないのでしょうか。あゝ、本当に最果ての地に来てしまった、と思うと妙に興奮して、ほとんど眠れません。

## オスロに負けない生活環境

翌朝、ヴァドソー市役所を探しました。経験したことのない烈風のなか、友人から教わったように「後ろ向き歩行」をしました。しばらく行くと、道路の先に市のシンボルである巨大なトナカイの彫像が見えて、そこが市役所でした。



▲北緯70度にあるヴァドソー市役所。強風のない日に撮影

受付で「男女平等政策について取材したい」と申し込んだら、午後なら担当者がいるとのこと。午後2時30分、再訪。市政ナンバーツーマリッタ・スカンシェンが待っていました。市政のトップは日本なら市長ですが、ノルウェーでは、選挙で選ばれる政治家の市長とは別に行政機関のトップに事務総長がいて、市政は市長との二人三脚で運営されます。マリッタは副総長でした。

**マリッタ** ヴアドソー市によろこそ。うちが「自治体の男女平等指数」第1位になったことは、新聞で知りました。昔から漁業中心のこの町は、男たちが海に出ていましたから、女たちが家や地域のすべてを担ってきた。だからでしょうね。

**私** 日本にも漁業の町はたくさんありますが、女性の力が社会的に強いとはいえません。

**マリッタ** ノルウェーも、劇的に変化したのは70年代からですよ。国の政策が変わったのです。ここの働く環境が女性に適しているのでしょうか。保健、

医療、学校などの職場に女性が目立ちます。今のヴァドソー市役所は、たまたま市長と事務総長は男性ですが、副事務総長の私は女性、その下の部長クラスもゼーンぶトップは女性です。彼女たちを紹介しますね（写真）。



▲左からマリッタ副事務総長、市長、女性2人は部長

**私** 公的サービスの充実で、公務員の職場が充実して、そこに女性が進出してきたということですか。

**マリッタ** そうです。公務員の男女賃金格差はありませんから、必然的に女性の立場が上がった。統計で、ヴァドソー市民の年間平均収入を見ると、男性345400クローネ、女性293600クローネで、格差0.85。オスロは男性463800クローネ、女性318800クローネで、格差0.68です。

**私** 賃金格差の解消はどうやって？

**マリッタ** 育児休業や病欠は女性が長く取る傾向がありますが、それによる賃金差別は厳禁です。当局と労働組合で賃金交渉をしますが、賃金差別を禁止する厳しい法律と、強い労働組合の存在が、格差を許さないのです。

**私** 女性が働く背景には、きっと保育園の充実がありますね。男女平等指数の調査項目でも、保育園がいの一番目に掲げられています。

**マリッタ** その通り。私が小さな子どもを育てていた頃は、保育園への入所待ちは、1年間以上でした。今は、1歳以上の子どもは、親が希望したら誰でも

もすぐはいれます。だから若いカップルがここに住みたくなるのです。

**私** 若い女性にとってオスロやベルゲンなどより、極北の町のほうが魅力的だなんて不思議ですね。

**マリッタ** 私は、ヴァドソーの出身ですが、10年間ベルゲンで働きました。子どもが生まれた後、両親の住む故郷に戻ったほうが子育てにはいいと思って調べたところ、ヴァドソーには、県庁、市役所、弁護士事務所、研究所、大学など高学歴女性に魅力的な仕事場があることがわかりました。オスロやベルゲンは仕事も多いけれど、応募者の競争も激しい。50代になってやっとつける管理的・挑戦的仕事を、ここなら20代、30代で経験できるのです。

**私** 日本の地方では、大卒女性の就職先は非常に厳しいものがあります。

**マリッタ** ここも以前はそうでした。女性だって、チャレンジングな、責任ある仕事につきたいものです。そういう女性を登用する政策が積極的に打ち出されたからこそ、Uターン現象が起きたのです。

## 取締役の半分以上が女性

ヴァドソー市議会は、40パーセントが女性議員でした。

日本の地方議会の女性議員は、都道府県議会で平均8%、市区町村議会なら11%。たとえば、福島第一原発のある双葉町議会は女性ゼロ、大熊町議会はたった1人。日本全体を眺めると、いまだに女性議員ゼロ議会が、市区町村のおよそ4分の1にも上ります。

「男女ほぼ半数の風景」を撮影したいと思って、再び、市の受付の女性に頼んでみましたが、議会は閉会中。落胆して受付横のソファにへたりこんでいると、受付職員が「どちらから?」。日本から来たというと私をまじまじと見て、すぐにあちこち電話をかけてくれているようでした。しばらくして、

「今すぐ、NAV（労働と福祉サービスセンター）という大きな赤いマークのついたビルの二階に行きなさい。イノーベイション・ノルウェーという会社があります。取締役会が開かれています。あなたの取材にピッタリですよ」

イノーベイション・ノルウェーは、ノルウェー観光局、ノルウェー貿易機構、ノルウェー地域産業振興ファンドなどが統合されて、2004年にできました。公的補助金や特許に関する情報の提供、合併や提携の指導、外国進出の援助、などをする国営コンサルティング会社で、社員700人。本社はオスロですが、



国内全県と海外30カ国にオフィスがあります。各オフィスの独立性は高く、それぞれに取締役がいます。

私は、凍った道路に何度も足をとられながらNAV（労働と福祉サービスセンター）の赤いマークをめざして走りました。

取締役12人が大きな楕円型テーブルを囲んでいて、6人が女性でした（写真）。サーモン工場をフィンマルクに新設したいという企業に、どんな支援ができるかが議題でした。



▲イノベーション・ノルウェー会社の取締役会議。男女6人ずつの12人

イノベーション・ノルウェー社の最重点方針のひとつは、産業界に女性を活かすこと。

「たとえば、支援を求めてきた会社で、幹部の女性が40%以下だったとします。われわれは、『あなたの会社への評価は低い』と、はっきりいいます。中には女性だけ、男性だけの企業や団体があります。その場合には支援は難しいことを知ってもらいます」と、特別相談役のトルルス・ヘルランドは説明します。

「ノルウェーのような小国が、どうしたら他国との競争に勝てるか。国中で考えに考えた末、『女性の力を発揮させること』こそが、重要だと気がついた。ノルウェーの知力の半分を担う女性の力が埋もれたままでは未来はない、とわかったのです。もう25年以上前の話ですけど」

## 「ここに来た会社は儲かるようになっている」

ノルウェーは、アフーマティヴ・アクション（社会的弱者を積極的に救済する制度）の国です。

最北のフィンマルク県の企業には、1990年から「特別産業ゾーン法」に基づく恩恵があります。給与税、電気消費税、建築投資税がかからない。そして県の住民には、所得税の免税措置、子ども手当増額、学生ローン返却減額措置、住宅ローンや住宅改築費での優遇措置などもあります（注1）。

イノーベイション・ノルウェー社のスタイン・マッテシェン社長は言います。

「ここに企業が進出したら確実に得をする、必ず儲かるように手が打たれているんですよ」

## クオータ制が後押し

その上で、ノルウェーには、女性へのアフーマティヴ・アクションというべき「物事を決める場には男女が少なくともそれぞれ40%いなければならない」という、女性を後押しするクオータ制（割り当て制）があります。

ノルウェーの政党がクオータを取り入れたのは、1970年代でした。

1973年に民主社会党（後の左派社会党）、1974年には自由党、1975年になると左派社会党。1983年に最大政党の労働党、1989年に中央党が導入しました。90年代になるとキリスト教民主党までが同調しました。

こうして政党は、選挙の候補者リストの氏名をほぼ男女交互に並べるようになり、結果として国会にも地方議会にも女性議員が爆発的に増えました。たとえば労働党のクオータ制は、綱領12項の9にこう明記されています（2011年現在）。

「選挙、任命において、どちらの性も50%でなければならない。理事会や委員会において、2で割れない場合は50%に近づけなければならない。国会

議員、県会議員、市議会議員の選挙では、候補者の1番、2番は両性によって割り当てられなければならない」

次いで1988年、公的決定の場にクォータ制を導入する法律ができました。1978年制定の男女平等法が「すべての公的委員会などに両性が少なくとも40%いなければならない」と改正されました。それまでの「男女平等でなければならない」という表現を「40%」という具体的数字に変えたのです。これで、行政機関の管理職に女性がどっと進出しました。象徴的なのは内閣で、80年代後半から今日まで、政権交代はあっても女性閣僚が全閣僚の40%を下回ったことは一度もありません。

2000年になると、経済界がクォータ制の洗礼を受けます。2003年、会社法に次の文言が付け加えられました。世界で初めてのことでした。

「国営会社は2004年から、株式会社は2008年から、取締役会に両性が少なくとも40%いなければならない」（会社法6条11a）

というわけで、国営会社であるイノーベイション・ノルウェーは、2004年の創立時から取締役の4割以上が女性です。

社長のスタインは、「当初、60%を女性取締役にしようというのが僕の案でした。しかし十分な賛成が得られなくて、仕方なく50%、つまり男女半々になってしまった」と、笑いました。

## 平等・連帯を反映させる民主主義の力

拙著『ノルウェーを変えた髭のノラ ——男女平等社会はこうしてできた』（明石書店、2010）に登場するベリット・オース教授は、2008年に会ったとき、社会の底辺に追いやられた女性たちを8つのカテゴリに分類した。その1つが「僻地の女性」です。

「ノルウェーは南北に長くて、3分の1は北極圏です。しかも山岳が多い。都市機能から隔離されているから、何をするにも不便です。そういう土地では、近くに教育機関も少ないから、高等教育を受けられない女性も多いでしょう。これで、夫が病気になったり亡くなったりすると、さらにブルネラブル（社会的弱者）になってしまう」

「こういう土地の人々を救済するには、そこに特別な光をあてる必要があります」（注2）。

ベリットの言う「特別の光」が、極北の町には間違いなく当たっていました。これは、平等・連帯の精神に裏打ちされた「民意」が、巧みな選挙制度によって吸い上げられた結果にほかなりません。これぞ、民主主義の底力だと思いました。

---

(注1) To You Who Want to Live in Finnmark <http://www.finnmark.no/>

(注2) ベリット・オースは民主社会党の初代党首、オスロ大学名誉教授（社会心理学）。1970年代に党首に就任して世界で初めてクオータ制を党の組織と党の候補者決定に実行した。